

ザーラ・イマーエワ (Zara Imaeva)

1961年生まれの、アゼルバイジャン在住のチェチェン人女性映像作家。国際アートセラピーセンターDiDiの創業者である。伝統主義的民族文化の豊かな旧ソ連領チェチェンの南部山岳地帯に生まれ育ち、モスクワ国立大学ジャーナリズム学科で学び、近代的な高い知的教養を兼ね備える稀有なチェチェン女性である。少女時代より映画監督を夢見て、学生時代にはモスクワの様々な撮影所でアルバイトの助手を務め実技を習得した。学生時代から揺籃期の地下独立運動に関わり、独立派政府の外務省広報官や文化省映画担当次官なども経験する。第2次チェチェン戦争とともに近隣のアゼルバイジャンに亡命、政治運動には距離を置き、2004年以来、精神的なトラウマを抱えた子どもたちへのユニークな国際アートセラピー活動をチェチェン人難民だけでなく、在アゼルバイジャンの広範な専門家や知識人、国際組織・外交団などの協力のもとに展開してきた。

映像作品に、チェチェン戦争難民の子どもたちの証言ビデオ「子どもの物語にあらず」(2001年)が、国際的に注目され、2003年秋、国際人権団体、アムネスティ・インターナショナル日本の招きで来日、全国17箇所で、講演・上映会形式のスピーキング・ツアーが組織された。難民の子どもたちの描いた原画によるアニメ「春になったら」(2004年)、チェチェン語による児童ミュージカル「お隣さん」、そのメイキングビデオ「私たちのDiD」(2005年)、チェチェンとアゼルバイジャンの難民夫婦の出会いと愛の物語「描かれた壁の家」(2008年)、在日韓国人作家、姜信子とのカザフスタンにおける両民族の強制移住と出会いの記憶を追った「いって・らっしゃい」(2012年)、DiDiに加わった重度障害児を描いた「私はエラザ」(2013年)などがある。

ザーラ・イマーエワとは誰か 第1回 日本招聘まで

おじいさん、おばあさんを知らずに育った

ザーラは1961年9月、チェチェン・イングーシソビエト社会主義自治共和国のソビエツキー地区、ソビエツコエ村で生まれた。この村は、旧来の地名をシャトイと言い、チェチェン南部山岳地帯に鋭いV字谷を作って流れるアルグン川の谷間の山村である。彼女の両親は、いずれも1944年にカザフスタンに強制移住させられたチェチェン人で、悲惨な境遇の中で両親を失った孤児たちだった。1957年にチェチェン人の復権が認められ、59年にシャトイへ戻って間もなく、ザーラの父母は結ばれ、彼女が生まれたのだ。ザーラは、子ども時代を振り返って、「私には、ものを尋ねられる、おじいさん、おばあさんが誰もいなかった。両親が二人とも孤児だったから。」と語っている。

映画監督になりたかった

村の中学校を卒業した彼女は、モスクワの全ソ国立映画大学(VGIK)劇映画監督科に入学し、映画監督となることを夢見た。しかし彼女は保守的な親戚一同の反対に遭遇し、説得に2年がかかった。ようやくモスクワに出た山国の少女にとって、ほとんどの入学者が映画関係者の子弟で占められた80年代初めのVGIKは、あまりにも狭き門であった。VGIK入学は果たせなかった彼女だが、狭き門ということではそれ以上の、モスクワ大学(MGU)ジャーナリスト学科への入学した。そして学生アルバイトに撮影所で助手を務めることで映画制作実務を身につけた。ジャーナリズムと映画制作の習得だけが彼女のモスクワ時代ではなかった。彼女は学生結婚し、一人息子のティムールを授かった。また、後のチェチェン社会を率いる重要人物たちと出会った。その中には、ソ連空軍の高級将校ジョハリ・ドゥダーエフ、MGU法学部の先輩、ホジ=アフメード・ヌハーエフらがいた。彼らは当時既に地下組織「チェチェン独立委員会」をつくっていた。

独立運動の激流の中で

ザーラはMGU卒業に10年以上かかった。子育て休学の上、卒論テーマ、「チェチェン人強制移住とジャー

ナリズム」が、大学当局を当惑させた。彼女が正式卒業を果たしたとき、ソ連は消滅していた。民主化の高揚の中でチェチェンの首都グロズヌイに戻った彼女は、小さな民放テレビ局（NTV）を立ち上げる。しかし、民主化から独立に突き進む激流が、NTVを洗い流した。エリツインのロシア連邦は独立を阻もうとチェチェンに介入する。大統領となったドゥダーエフは、ザーラを外務省報道官に任命する。独立派が首都を追われると、国外に出てジャーナリスト活動を続けた。97年、マスハドフ政権が誕生し、こんどは文化省映画担当次官に任命される。しかし灰燼に帰したチェチェンの「映画」は限りなくゼロに近かった。何も進展のない中、失望した彼女は辞任し、モスクワでチェチェン音楽家たちのCD出版のプロデューサーの傍ら、テレビ番組制作の企画を進めて再起を図る。99年夏、ようやく通った企画、「チェチェンの石塔建築」を巡る旅番組の撮影準備を故郷のシャトイ村で進めていた彼女に届いたのは、バサーエフ派のダゲスタン侵攻と、引き続くロシア軍のチェチェン侵攻のニュースだった。

難民となって

アルグン峡谷にあるシャトイ村には幹線道路は1本しかない。谷沿いに下れば平原部に出てグロズヌイに至り、谷を遡れば上流は、大コーカサス山脈の裏側、グルジア領まで続いている。彼女は親戚に託して息子のティムールをイングーシ共和国に送り、老母の世話をしながら村で情勢を伺い、晩秋に、避難民たちを率いてグルジアに逃れた。雪の峠越えの道は厳しく、健康を害した彼女は長く後遺症に悩まされることとなった。グルジアでジャーナリスト活動を再開するつもりであったが、避難民を送りとどけたアゼルバイジャンの首都バクーで、ヤンダルビーエフ政権で第一副首相を務めた後、総合商社「コーカサス共通市場(CCM)」を開いていたMGUの先輩、ホジ＝アフメード・ヌハーエフに勧められ、CCMの広報担当となった。

離別家族の再会

ロシア軍はついに2000年前半、グロズヌイを陥落させ、また山麓部のコムソモリスコエ村を包囲して、ここでハムザト・ゲラーエフ司令官の率いるチェチェン軍部隊を壊滅させる。この包囲戦の中で、ザーラの夫も死んだ。イングーシに逃れた息子ティムールを引き取りにザーラは行けなかった。独立派政府官僚の経歴は、拘留される危険をはらんでいた。彼女の親友がモスクワ経由で彼をバクーへ送ろうとした。50代のチェチェン女性と13才のティムールは、モスクワに着くとチェチェン人というそれだけの理由で、警察に拘禁された。彼らの窮状を救ったのは、ロシア人のパイロットだという。彼は強引に二人を引き取るとイングーシ行きの便で出発地に送り返した。ティムールが母親の元にたどり着いたのは別れてから半年後だった。シャトイに残っていた老母もバクーに来た。ザーラは自分たちを珍しい幸運という。周りの人びとは、はるかに悲惨な離散経験をしているから。

ビデオ「子どもの物語にあらす」

2000年夏、チェチェンからの難民流出は続いていた。CCMで働くザーラは、難民の記録を残すことを思い立ち、被写体となってインタビューに応じてくれる子どもたちに、せめてものお礼に渡すピロシキ（ロシア風の揚げパン）を持っては、激務の合間に難民の一時収容施設などを回っては、記録を残していった。表現に一体感を持たせようとインタビューは必ず白い背景の前で行った。2000年秋、アゼルバイジャンの小さな民放テレビ局の技術協力があって「子どもの物語にあらす」は、完成した。当初、彼女は意気込みと結果のギャップに落ち込んだようだが、ロシアの人権団体が先ず、こ品に注目した。2001年3月に彼女をモスクワに招いてアンドレイ・サハロフ記念博物館・社会センターが発表会を開催した。4月、モスクワNTVの当時のメインキャスター、エフゲニー・キセリョフは、夜の最終版ニュースで発表会の模様を紹介し、作品のかなりの部分を放映した。だが2週間後NTVのウェブサイトから「子どもの物語にあらす」放送の事実が抹殺された。しかし、ロシアの人権団体は、「子どもの物語にあらす」のコピー配布を続け、少なからぬ教師たちが、学校でこのビデオを見せている。またチェチェン戦争集結を求めるイベント会場でしばしば、この作品が上映されている。

岡田一男（映像作家） 2003.10.19.